

住民主体の小さな武庫川づくり 4つの取り組み

石原清・市橋雅恵・上田宏・大島勲・亀井敏子・神田洋二・古武家善成・佐々木礼子・
白神理平・竹内勝・辰登志男・土谷厚子・法西浩・山岡泰寛・山本義和・吉田博昭
(武庫川づくりと流域連携を進める会Ⅱ 武庫川講座)

はじめに

武庫川講座は、3年間の座学と1年間の実習で、河川に関わる一般的な基礎知識を身に付け、武庫川流域圏をさまざまな角度から知り、河川での実践活動を体験することで、これから始まる住民主体の武庫川づくりの実践に際し、川づくりリーダーとして活躍できる人材を育成することを目的に開講されたものである。その最終年度である平成30年度は、武庫川づくりに特定した川づくりのフィールド実践にむけて、武庫川づくりに必要な4つのジャンル・グループに分かれて、企画立案から実践までを一つの研究課題として1年をかけて習熟をめざした。4つのグループとは、①水辺を知る住民だからこそできる水辺の環境づくりの実働部隊「水辺の小さな武庫川づくりグループ」、②武庫川のシンボルフィッシュ“アユ”の遡上できる武庫川づくりをめざして水辺の生きものの実態を把握する「武庫川発掘研究グループ」、③武庫川に流れ込む水を集水する流域圏の健全な流域づくりに貢献する自然環境と有機農業を把握する「里地・里山発掘研究グループ」、④上流から河口まで武庫川流域圏の遺産である魅力を再認識し、広く世の中に周知させることで武庫川を守り、素晴らしい武庫川を次世代に継げる手立てを考える「川まちづくり発掘研究グループ」である。これら4グループの一年間の研究活動の概要を取りまとめた。

4つのグループによる課題と取り組み

1. 水辺の小さな武庫川づくりにむけて

水辺の小さな武庫川づくりグループ：
亀井敏子・佐々木礼子・白神理平・山本義和・吉田博昭

活動概要

平成30年は、21号台風の襲来により仁川付近での倒木が目立ち、次いで西日本を襲った豪雨が仁川合流付近に大量の土砂堆積をもたらし、魚類の棲める環境が脅かされた。繰り返される洪水による堆積土砂の掘削は、行政による重機を駆使した「おおわざ(大技)」で復旧され、行政では手の届きにくい水辺の生きものが集える細々とした水辺の「こわざ(小技)」は、常日頃から水辺にふれ合い生きものを見続ける地域住民の手で行なった。具体的な手法は、生きものの気持ちになって川床を少し掘り下げ、小石や土砂を動かすことで本流につなぐ取り組みを実施した。その結果、一月の経過を待たずに数匹のメダカが帰ってきた。また、草を刈り、倒木を伐木して川へのアプローチづくりも実施した。作業をしていると、子どもたちが物珍しそうに「何してんのん?」と声をかけてくれたが、重労働による疲労と終わりの見えない作業はこの声に励まされ癒された。



まとめ

土砂掘削工事の際は、長年観察し続けてきた経験から出た我々の意見を導入してもらうことができた。武庫川で出会う多くの人から「武庫川の清流で遊んだ記憶」が異口同音に語られる。とくに下流域では人工護岸が人を寄せつけず、潮止め堰をはじめとする幾つもの堰がアユなど魚類

の遡上を妨げ、人工的な河川施設は、人からも生きものからも自然体である河川環境への改修が望まれている。河川環境の自然体を求める一方で、流域の安全を守る河川改修事業に理解を示すことを目的に、行政主催行事への積極的な参加を行うことで、行政と住民による「参画と協働の川づくり」を実感することができた。まだまだ、地に足がついた活動とは言い切れないが、仁川合流付近を出発点に、草の根活動である小さな川づくりから近隣の支派川にも広がり、流域全体に波及し、活動を通して広く活動団体や個人の連携の環につながることを期待したい。

2. 生物多様性の豊かな武庫川に～手始めに、呼び取り戻そうアユを、私たちの武庫川に～

武庫川発掘研究グループ：石原清・市橋雅恵・古武家善成・竹内勝

活動概要

武庫川は例年4月上旬頃にアユが遡上する標準的な河川で、昨年も第一号堰堤での目視による観察を行い会員が遡上を現認している。専ら付着藻類を食性とするアユの食み跡調査を仁川合流付近で試みたが観察できなかった。調査場所か方法に問題があったのか、川幅の割に遡上数が少なく分布が希薄で分かり難かったのか、それとも生息していないのか定かでない方針を転換した。初心に戻り、川幅も狭く水も透明でアユの水族館とも思える住吉川で生態観察からやり直すことにした。遡上時期は逃してしまっただけで、アユがコケを食む様子、産卵時期に数cm程度の礫床に集まり産卵行動ではないかと思える行動や産卵斃死鮎も観察することができた。産卵調査では、小石に生み付けられた卵2卵を観察することができた。12月16日までアユが観察されたが翌日には全く姿を見せず12月中旬頃に産卵を終えることが分かった。



まとめ

夏期の武庫川は極端な水量減と水温も30℃を越える厳しい環境下で、アユの生息可能場所はあるのか、どこまで遡上が可能なのか、何が遡上の障害になっているのか、産卵に適した場所はあるのか、産卵して海まで下っているのか、目視・捕獲調査以外に環境DNAなど新たな調査技術の採用の検討をしなければならない課題発見の年であった。

3. 武庫川上流の有機農家を訪ねる ～自然を楽しみながら有機農業の大切さを知ろう～

里地・里山発掘研究グループ：土谷厚子・辰登志男・法西浩

活動概要

武庫川流域圏の里地・里山の魅力発掘～流域圏の健全な水環境の恵みを味わう(環境保全)武庫川の環境改善に寄与する自然農法、自然の恵みを巧みに食生活に取り入れた里ならではの暮らしを学び、昔からの生きものを守りながら進められた多自然型河川改修現場で関係者の苦労話と工事後の自然回復状況の説明をうけ、自然と調和した暮らしについて考えた。

豊かな自然と調和した暮らしを営む日出坂の農家からも協力を得て、相野～草野間の武庫川流域のウォッチングを実施し、①自然観察、②自然農法が営まれている田畑見学、③有機農業と食事に自然の恵みを活かした暮らし、④地元の意見を取り入れて造られた日出坂洗堰の見学、⑤草野付近の武庫川改修工事で景観と水棲生物に配慮した多自然型改修工法事例と現状とこの先の見通しなどの説明を受けた。

農家の不断の努力で守られた豊かな自然を体験し、地域に伝わる民話や歴史を習って歩いていると、山肌の中程に建てられた撰津と丹波の国境碑も遠い昔話ではなく身近に感じられ、草



野橋から見た武庫川とその向こうに見える山々の風景は心に残るものだった。

まとめ

日出坂の農家や地域の篤志家で守られている武庫川の自然も誰かが守らなければ、経済性優先の川づくりまちづくりが進められてしまう。我々ができることは限られているが、この地域に関心を持ち続け、自然に配慮した農産物を暮らしに取り入れることで応援することはできる。

4. 武庫川にワクワク～上流から河口まで魅力いっぱいの地域の歴史を知り 未来を考える～

川まちづくり発掘研究グループ：神田洋二・吉田博昭

活動概要

武庫川流域には多くの伝説が残る歴史ある地域がある。中でも武田尾峡谷はその形成過程が稀少な先行峡谷であることから奇勝奇岩が連なり、武田尾温泉や福知山線廃線敷、桜の園などが観光客を惹き付ける魅力的な地域となり、阪神間のジオパークといっても差支えない武庫川の遺産的なゾーンであると思われる。そのようなこの峡谷部にかつて計画された武庫川ダムは一時棚上げされたとはいえ、峡谷区間である道場～生瀬間では新名神高速道路工事によって山肌が大きく開削され、谷間では河道付替えに伴う改修が工事が各所で進められた。また、大雨の洪水によって被害を受けた支川合流域や護岸ではコンクリートを主体とする護岸に改修されるなど、景観は大きく変わろうとしている。流域の安全を守るために必要な改修は行うべきだろうが、その手法には住民の思いも含めた工夫が求められるが、過去の記録がなければ現在を評価することはできない。あるべき未来も創造できない。景勝地である武田尾峡谷の景観・文化の「今」を遺して「未来に」伝えることこそが、今生きている者の責務だと考える。我々にできることは限られているが、「今」を残す取り組みとして①景観や生きものなどの写真記録と現地で出会った人々の声の聞き取り、②身近な歴史資料、伝説など過去の資料収集整理を行い、③新たな土木事業など工事の着手前、経過、竣工後の現場写真記録及び情報などの収集・災害・事故の調査録記をとり始めた。



まとめ

広く多くの人々が魅力を知り、伝え合い、発信することで楽しさの倍増効果が期待できる。さらには新しい感動を知ってワクワクすることで流域の皆の誇りと連帯感が深まると考えられる。

おわりに

平成 27 年から武庫川流域委員会の提言書に基づき住民参画型の流域総合治水の一環である住民主体の武庫川づくりをリードする武庫川守の養成講座を続けてきた。3年一括りの座学中心の講座に引き続くフィールドでの実践講座を踏まえて、具体的に川づくりをリードする力量を養い、新たな活動団体を立ち上げるなどそれぞれのやり方で川づくりに努め、将来的にはそれぞれが関わる団体間の連携活動ができることまでを期待している。既にホームグラウンドで川づくりをリードする活動を始め、活躍する受講者も出はじめていることは素晴らしいことである。